

2020年1月28日

博士学位審査 論文審査報告書（課程内）

大学名 早稲田大学
研究科名 大学院人間科学研究科
申請者氏名 松坂 仁美
学位の種類 博士（人間科学）
論文題目（和文） 幼児の生活習慣と体格、体力・運動能力の実態と課題
論文題目（英文） The current status and issues of young children's lifestyle, physique, physical fitness and motor ability
公開審査会
実施年月日・時間 2019年12月18日・10:00-11:00
実施場所 早稲田大学 所沢キャンパス 101号館 207教室

論文審査委員

	所属・職位	氏名	学位（分野）	学位取得大学	専門分野
主査	早稲田大学・教授	前橋 明	博士（医学）	岡山大学	子どもの健康福祉学
副査	早稲田大学・教授	加瀬裕子	博士（人間科学）	早稲田大学	老年学
副査	早稲田大学・教授	扇原 淳	博士（医学）	順天堂大学	社会医学
副査	山梨大学・教授	浅川和美	博士（医科学）	山梨大学	生活科学一般

論文審査委員会は、松坂仁美氏による博士学位論文「幼児の生活習慣と体格、体力・運動能力の実態と課題」について公開審査会を開催し、以下の結論を得たので報告する。

公開審査会では、まず申請者から博士学位論文について30分間の発表があった。

1 公開審査会における質疑応答の概要

申請者の発表に引き続き、以下の質疑応答があった。

1.1 質問：運動あそびの実践や保育者との関わりは、杉原氏らの研究でなされているが、園内の環境の検討は、あまりないと思う。その点の分析はしているのか。

応答：本研究では、その点についての検証はできていないが、今後の課題として、第4章第2節にあそびの提案として、現状の園内環境の中で、身体活動を伴ったあそびの例を取り上げた。

1.2 質問：保育者の運動あそびへの取り組みについての意識を高めることを述べていたが、保護者の意識を変える働きかけについてはどう考えているのか。

応答：日本社会の就労状況や保育事情について将来的ニーズを考えると、日々の生活の中で、戸外でからだを動かして遊ぶことや、就床前に親子のふれあい等を要求すると、保護者の負担となる。そこで、1日の最も長い時間を過ごす保育（幼稚園）園で、保育者が、戸外あそびや運動あそびの重要性を理解して、日々の実践

を行うと、子どもがからだを動かしているいろいろな運動スキルに挑戦する。すると、保護者の方から子どもの遊ぶ様子に関わろうとするので、保育者の取り組みが改善されることが大切であると考えた。

- 1.3 質問：幼稚園幼児と保育園幼児の園内歩数の比較において、保育園幼児の方が少ない原因を分析できないか。

応答：歩数は、幼稚園では9時30分～13時30分の間、保育園では9時30分～16時の間、測定した。幼稚園は、昼食後、園庭での外あそびを行うが、保育園では、午睡となり、午睡後も、おやつや室内あそび等の座行動が多いことを、本論に記載した。

- 1.4 質問：調査1で、家庭での外あそびの45分を基準に、外あそびの長い群と短い群に分けたが、幼児期運動指針では、1日60分の運動を目安としているので、45分では短すぎる。

応答：幼児期運動指針の60分は、1日のトータルのからだを動かす活動の最低基準で、保育園や幼稚園での動的活動時間と家庭での軽い運動活動を含んで、60分以上となる。

- 1.5 質問：からだを動かすことや戸外あそびの重要性について述べていたが、最近の保育施設には園庭がないところもある。このような場合の運動あそびの実践について考える必要があるのではないか。

応答：認可外保育施設や小規模保育園が増えることが、今後は想像できるので、からだを動かす活動のための方策について、戸外あそびだけでなく、時間の使い方や室内のあそびの環境づくりについても提案していきたい。

2 公開審査会で出された修正要求の概要

- 2.1 博士学位論文に対して、以下の修正要求が出された。

2.1.1 夜間に10時間以上の睡眠時間の必要性のエビデンスを明確にする。

2.1.2 生活習慣、体格、体力・運動能力と歩数の測定について、測定の条件や結果を整理し、わかったことと明確になっていないことを簡潔にする。

2.1.3 近年という曖昧な記載はやめ、年号を用いて、論じる。

2.1.4 調査・測定方法と調査内容、結果の全体像が明確になっていない。

2.1.5 6つの調査は丁寧に行っているが、一つの論文としての全体的な構造が見えてこないため、明確化することが必要である。論文全体の構造を本論に記載すること。

- 2.2 修正要求の各項目について、本論文最終版では以下の通り修正が施され、修正要求を満たしていると判断された。

2.2.1 夜間に10時間以上の睡眠時間の必要性（幼児）のエビデンスを明確にするための文献8、文献108を確認した。

2.2.2 方法の中に、各調査の対象人数、測定期間や内容、調査・測定の条件を、本論では一覧表に示し、結果は、本論の中で簡潔に述べるように書き直した。6つの調査の調査方法は、表に示され、わかりやすく改善され、結果は、調査ごとに明らかになった内容が、簡潔にまとめられた。

- 2.2.3 年号で示すため、社会的背景を押さえ、裏付けをもって修正していた。
- 2.2.4 測定条件や調査内容と結果の全体像が明確になるように、目的と方法、導き出された結果を、6つの調査別にまとめ、今回の研究で明らかになったことが簡潔に記載された。
- 2.2.5 本論の緒論に全体の構造について、6つの調査を使って、幼児の生活習慣、体格、体力・運動能力と歩数を総合的に分析することと、生活リズムづくりに寄与する、園内生活時間内でできうる活動の提案を記載された。

なお、本論文で実施した実験の手続きについては、早稲田大学「人を対象とする研究に関する倫理委員会」の承認を取得し（2017-HN006）、実験の前には参加者に対して実験内容についての十分な説明を行い、インフォームドコンセントが得られた上で実施したとしており、倫理的な配慮が十分になされていると評価した。

3 本論文の評価

- 3.1 本論文の研究目的の明確性・妥当性：本研究では、幼稚園幼児と保育園幼児を対象として、幼児の生活習慣と園内生活時の身体活動量、身体状況としての体力・運動能力について、総合的な検討を行い、子どもたちの生活状況や身体状況を把握し、基本的な生活習慣を身につけ、体力のある幼児の育成のために、運動あそびの取り組みについての方策を提案することは、研究の目的として明確であり、妥当であると考えます。
- 3.2 本論文の方法論（研究計画・分析方法等）の明確性・妥当性：本論文は、幼稚園幼児を対象とした2つの調査と保育園幼児を対象とした3つの調査、保育園幼児と幼稚園幼児の差異の検討のための調査の、計6つの調査からなり、これらの調査を通して幼児の生活習慣と体力・運動能力および園内生活時の歩数を測定することは、課題を抽出する上で妥当であると考えます。
- 3.3 本論文の成果の明確性・妥当性：本論文は幼稚園幼児と保育園幼児を別々に調査測定することを通して、その特性を明らかにし、さらに幼稚園・保育園において同じ調査・測定をすることで、その差異を確認した。幼児教育現場における日々の運動あそびの実践の重要性が浮き彫りになったことから、成果は明確であり、研究内容は妥当であったと考えます。
- 3.4 本論文の独創性・新規性：本論文は、以下の点において独創的である。これまで幼稚園幼児か保育園幼児か明確化されていない「幼児」というくくりで対象とした研究はなされてきた。しかし、実際には、保育園幼児と幼稚園幼児では、降園時刻に4時間程度の差があり、その影響を明らかにしたいと考え、幼稚園幼児および保育園幼児別に測定と調査を行い、生活習慣、体格、体力・運動能力と歩数を総合的に捉えたことは、独創的である。さらに、幼稚園幼児と保育園幼児の差異の比較から、4時間の違いが生活習慣や身体活動性にどのような影響を与えているかを明確化し、健康的な生活習慣を身につけ、体力のある幼児の育成のための方策を検討した。あわせて、日本社会においては、家庭よりも保育・教育現場における運動あそびの取り組みが、身体活動量確保には重要であることを示唆したことは、新規であると考えます。

- 3.5 本論文の学術的意義・社会的意義：本論文は、以下の点において学術的・社会的意義がある。
- 3.5.1 2000年に、共働き家庭と専業主婦家庭数が逆転し、現在は共働き家庭が専業主婦家庭の倍となり、そのため、保育園や幼稚園の預かり保育に通う幼児は増えた。その結果、子どもたちの帰宅時刻は遅れ、夜型社会の影響によるネガティブな影響が生じている現状がある。また、「早寝・早起き・朝ごはん」運動が始まって、10年以上経過したが、幼児の生活習慣は改まらない。生活習慣や生活状況の詳細な調査から、現代の子どもたちの抱えている問題を明らかにし、解決策を検討することの学術的・社会的意義は大きい。
- 3.6 本論文の人間科学に対する貢献：本論文は、以下の点において、人間科学に対する貢献がある。
- 3.6.1 保育料の無償化がすすみ、認可外保育所が推進される等、子どもたちは、乳児期から親子で1日の十分な時間をいっしょに過ごすことは難しく、日没前に帰宅できない現状が増える。乳幼児の健康管理上の課題として、保育園や幼稚園において子どもの体力を向上し、幼児に必要なより良い睡眠習慣を形成するために、園内での日中の過ごし方が重要となる。帰宅後の身体活動のあるあそびをしない子どもたちの生活を考えると、保育園や幼稚園の生活での身体活動量の獲得が必須であり、このことは人間科学への貢献となると考えられる。
- 3.7 不適切な引用の有無について：本論文について類似度を確認したうえで精査したところ、不適切な引用はないと判断した。
- 4 学位論文申請要件を満たす業績（予備審査で認められた業績）および本論文の内容（一部を含む）が掲載された主な学術論文・業績は、以下のとおりである。
- ・「幼稚園幼児の降園後のあそびや活動の実態と健康管理上の課題」
レジャー・レクリエーション研究 82、pp. 13-20、2017.
 - ・「保育園幼児の生活習慣と体格、体力・運動能力の実態と課題—就寝時刻からの分析—」
レジャー・レクリエーション研究 85、pp. 23-32、2018.
 - ・「保育園幼児の園内生活時の歩数と生活リズムの関係」
レジャー・レクリエーション研究 88、pp. 45-52、2019.

5 結論

以上に鑑みて、申請者は、博士（人間科学）の学位を授与するに十分値するものと認める。

以上